

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書 15 章 25-32 節＞

1 兄について思う二つのこと。

この部分を読むと兄について思うことが二つあります。一つは、帰って来た弟を父親が受け入れたのを見て怒るのも当然かなと思うこと。もう一つは、それにしても前半の話から通して感じる兄の暗さです。

2 父親の度を越した喜び様が悪いの？

兄の怒りは、弟を受け入れる父親の度を越した喜び様にありました(29-30)。しかし、それが兄に感じる暗さに関係しているとも言えます。彼はなぜ父親と一緒に弟の帰還を喜べなかったのでしょうか？

3 兄はファリサイ人や律法学者と同じ。

実は、放蕩息子のたとえ話は、イエス様が徴税人や罪人(遊女など)と一緒に食事していることを非難したファリサイ人や律法学者に対してイエス様が語られたたとえ話でした(15:1-3)。兄はファリサイ人や律法学者なのです！ 彼らは確かに真剣に神の戒めを守ろうとしていましたが、その姿に喜びは感じられません。兄に感じる暗さと同じです。

4 兄に抜け落ちていることは何か？

兄が知らないでいることがあります。弟が父親の下で生きることの恵みの大きさに心底気づいたことと(17)、弟は歓待されることなど全く期待していなかったということです(18-19, 21)。父親が弟の帰還を喜んだのです。「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」(32)。私たちがまた、放蕩の限りを尽くした弟の立ち帰りをこれほどに喜んで下さる神様を知らず、この神様抜きで自分と他人を比較することだけで人生を歩む限り、結局、満足も平安も得られないのです。

5 私たちはどちら？ 弟？ 兄？

皆さんは自分を弟と兄のどちらだと思えますか？ 大事なことは、神様は弟も兄もどちらも愛し、どちらにも恵みを注いで下さり、神様の方から見捨てられることはないということです。神様から離れて生きていた私たちが、神様の下で生きる恵みに気づいて戻ること、ただそれがあるだけです(先週お話しした「罪」と「悔い改め」の原意に注目。その信仰の告白が「洗礼」)。その時、兄の暗さ(奴隷が主人に従う姿)は神様の恵みに気づいた弟の明るさ(子どもが親を慕う姿)となり、弟の帰還を父と一緒にあって、度を越した喜びで迎えられることでしょう。